

連合赤軍

と

我々

革命家とは、革命的な情セウになった時、革命的な人間のことでなく、反動がもっともきびしく困難な時に革命的でありつづける人間のことだ。

獄中書簡集

書簡集作成にあたって

我々は、今回の事件が、決して他人ごとではなく、日本革命の内容を問う本質的な問題をはらんでいるのではないかと考えています。残念ながら、討論の材料となる報道はすべて、マスコミによって歪曲されたものですが、この困難な状況においても、我々の視点でとらえかえし、今回の事件の教訓を、革命斗争の中で、有意義なものとする必要があるのではないのでしょうか。特に獄中の戦士においては、資料不足や、討論の場が、セクトなどに限られていることから、大衆的に討論し、批判しあう場として、この書簡集を作成いたしました。獄外で活動している皆さんにとっても、討論資料として、お役に立つだろうと思います。今後も、新しい意見・反論・批判・補足など、引き続き募集し、まとまりしだい作成していくつもりですので、どんどん、人救あてにお送り下さい。

弾圧をはねのけ前進せよ(東郷輝)

団結を強め、弾圧をはねのけて前進せよ。 城崎 勉

2月18時間に及ぶ「あさま山荘」で英雄的革命的な持久的銃撃戦、なぐんづく、2月28日の徹底抗戦＝苦攻防戦に示された英雄的5战士の献身性、大胆さ、不屈の革命魂、革命的人道主義、確固たる決意、固い結束、規律ある美事な行動、銃を自由に使いこなす能力etc.。総じて人民の武装＝人民の軍隊のすばらしさと日本社会主義革命戦争の到達地平を明らかにしたところの英雄的革命的行為に驚愕した日本帝国主義ブルジョアジーは、マスコミ、評論家etc.をフル動員して、至少なデッチありと種々のフレームアップを行い、「人質」救出なる美名の下に、皆殺し作戦を強行したのである。

ブルジョアジーは、あの強行作戦でもって、警察(機動隊)でもまだ治安能力があることと、権力に反逆したならば必ず罰まること、反逆の度合によつては殺されても仕方がないのだということを全人民に誇示し、恫喝を行なったのである。又、種々の「評論家」「御用学者」又はエセ・マルクス主義者etc.をひっぱり出して革命戦争派の異常性、反社会性、狂人etc.のフレームアップを行い、人民と分断し、社会から抹殺せんとしたのである。同時に、反革命弾圧の強化を正当化し、新兵器の実験の場ともしたのである。

そして今、我々革命戦争派の内部に汚点が存在したことを見つけたブルジョアジーは、とびあがらんばかりに狂喜し、フレームアップを徹底化し、ますます反革命弾圧を強化しているのである。ブルジョアジーは、我々の汚点を握ったことに狂喜し、事実を歪曲し、誇大に宣伝し、デマを流布し、プロレタリアートの武装の正当性を奪い取り、武装斗争の芽を残らず摘み取ってしまうおうとしているのである。我々は、ブルジョアジーのこの姑息な陰謀を許してはならない。我々は武装斗争路線を堅持し、その正当性を高々と掲げ、より一層団結を固めて進まねばならない。

勿論、我々は内部に汚点があったことを隠蔽したり、うやむやにしよう等

とは思わない。我々はむしろ自らの欠点をさらけ出すであろう。自己の汚点をさらけ出し、自己切開し、全人民の批判を受け入れつつ、自己改造を行い、更なる飛躍を怠らんとするであろう。体内の病気を隠蔽したり、自己の正当化を行ったならば、あるいは責任の一切を少数の責任者におしつけて病源を曖昧にし、この局面をのりきらんとするならば、人民からソップを向けられ、必ずや失敗(完全なる)するであろうから……。我々は決してブルジョア政治委員会の如き本質の隠蔽や首のすげかえ、トカゲのしっぽでしごまかしをしたりするようなことはしない。我々は自己の誤りを分析し、自己切開し、病源を取り除き、たとえ何年かかろうとも必ずやこれを治療しつくし、この痛手から立ち直るであろう。――

ところで今、社共(彼らの病敗ぶり、反人民性、反動性、又はブルジョアジーの補綴物としての存在については周知のことであるが)は言うに及ばず、「新左翼」内部にも、ブルジョアジーのこの謀略を見抜くことができず、荒れ狂う反革命の炭におびえ、ブルジョアジーに唱和して、連合赤軍を排斥し、武装斗争に敵対する部分が生じてきている。彼らは武斗派を排斥し、自ら武装を解除し、合法性の看板を掲げてブルジョアジーに眉へつらい、自己保身を計ろうとしているのである。連合赤軍内部に生じた誤りの根源を直視するのではなく、盲目的に武斗路線に反発し、武斗路線を否定し、右翼日和見主義・軍事反対派として、延命を計らんとする姑息な部分が存在するのである。

一例を挙げよう。ここにちょうど、四丁口の機関紙「世界革命」3/21号がある。中央政治局「声明」は言う。〈連合赤軍によるこの間一切の行為(初期の段階におけるテロ行為、現金ならびに銃器類の強奪、山岳地域における活動拠点の設営、内部での幾多のリンチ・殺人、あさま山荘における「籠城」、逮捕後の憲官に対する自供等)は、その行為の破産した性格のゆえに、全アジアならびに極東アジアにおける帝国主義支配の解体打倒をめざす被抑圧諸人民の解放

斗争に対する重大な敵対行為であり、かつ敵権力に対する挑発・利敵行為である。〉

何という破廉恥、何という墮落であることよ。これが「革命的」と自称する党派の弁であるとは……。なんと「日本共産党」とかいう立派な名前のところと似ていることよ。これがIRA(アイルランド共和国軍)の武装斗争(銃撃戦、爆弾テロ、Geld 徴発、武器奪取 etc)を支持すると言ったり、あるいは、アルゼンチンERP(人民革命軍)の武装ゲリラ戦、金融機関しゅう奪 etc、を支持する云々と公言していた「世界革命」紙の論調なのだ。

我々は自分達の行為の全てが正しい等とは決して言わない。我々革命戦争派は未だ生れにばかりであり、確固としたものではないが故に、幾多の誤りを犯しながら成長してゆくだろうことは自覚している。それ故、自らが犯した誤りに対しては人民に責任をもって答えるであろうし、批判に対しても答えてゆくだろう。だが、武装斗争に敵対し、武斗派を排除し、武装斗争を否定せんとする者に対しては断固として斗わねばならない。それが「まじめな」日和見主義であれば余計に……。

彼らの論理は、インドシナ三国人民を最先峰とする全世界プロレタリア人民の(民族解放)社会主义革命戦争に連帯し、同様の斗いを日本にもちこみ、斗い抜かんとする者に対する敵対行為であり、人民の武装を解除し、ズブズの合法主義へと陥るものである。「このように、その時の目前の利益のために重大な主要観点を忘れること、このように後日の結果を考慮せずに一時の成功を求めねらうこと、このように運動の現在のために運動の未来を犠牲にすることは、まじめな気持でなさされているかもしれないが、やはり日和見主義であるし、またつねにそうであろう。そして「まじめな」日和見主義こそ、おそらく全ての日和見主義のうちで最も危険なものである。」(国家と革命)

四丁口の諸君よ、そして全ての同志達、決して我々は武装斗争を放棄して

はならない。失敗を恐れる余りに武装斗争を否定したり、ブルジョアジーの反革命キャンペーンに唱和したりするようなことはやめよう。権力の卑劣な反革命宣伝を真に受けて、自ら武装解除することほどこっけいなものはないであろう。それは「赤湯を流さんとして、赤子まで流してしまう」行為でしかないのだ。ウソの見本のような警察発表をうのみにしたり、それに輪をかけたようなマスコミの論調や「評論家」どもの言葉を信じこむような馬鹿げたおめでたさを發揮してはならない。ブルジョアジーの歪曲かつ愚劣な論調を信じこみ、彼らに唱和することこそ、反革命利敵行為なのだ。

我々は怖れることなく武装斗争路線を堅持し、前進しなければならぬ。プロレタリアートの闘いの昂揚が、その対極にブルジョアジーの密集した反革命を生み出すのだということ、我々はそれとの闘いの中で鍛えられてゆくのだということを、いま一度確認しようではないか。我々はブルジョアジーのあらゆるキャンペーンやフレームアップの本質を見抜き、これをはねのけて、日本社会主義革命戦争を發展させてゆかねばならないのである。

- 内部の誤りを正し、団結を強め、ブルジョアジーのあらゆる姑息な策動を粉砕しよう！
- 反革命弾圧＝治安強化を許すな！
- 団結を強め、武装斗争路線を高々と掲げ前進せねばならない！
- 日和見主義的自己延命策動を許すな！
- 「六全協」の再来を許してはならない！
- 世界革命戦争勝利！
- 銃雷戦断固支持！
- マジストピックに死を！

〔注、別に口頭の諸君にうらみがあつたわけでも何てもないが、たまたま手元に「世界革命」紙があつたから批判させてもらった事を断つておきます。〕

ささやかな私的見解 鈴木 保 (中野)

厚い獄壁をへだてながらも、人間解放を実現すべく闘い抜いている同志諸君に対して、連合赤軍事件についての、ささやかな私的見解を送りたいと思います。

日本階級斗争が69-71年の苦斗から、いよいよ内乱-内戦の端緒をつかみ誰一人となく、革命か反革命かが向われ、自己の全生活の貫徹が、軍事的=暴力的にならざるを得ない今日、我々の思想は一点の曖昧さもなく、その全体系と基盤が無慈悲に試練にかけられています。小ブル思想、日和見、敗北、排外主義にまみれているものは、このドラスチックな時代では反革命に転落するか、よくても体制内の「左翼」に転落する以外にない。日帝のアジア侵略は沖縄返還政策のペテンに全体制の重みをかけて、その破局を暴力的に突破しようとするものである以上、我々帝国主義本国人民は、これを内乱に転化することをもって応えることを任務とせねばならない。内乱の時代は根柢から、その人間の思想、生き方、人間性を向う。内乱は非妥協的であり、中間主義をはじきとばし、ギリギリとした緊張の中で人間の一切を向う。一切を向うからこそ、内乱は人間解放への必然過程だ。我々帝国主義的人間は、内乱の鉄火を経る中で自己の腐敗した体質を払拭する。そして内乱を経る中で我々は奪わねば一切のものを奪還する。真実の人間を！

さて、連合赤軍事件——あさま山荘銃雷戦、集団粛清事件——について展開をしてみたいと思います。

まづオーに銃雷戦の評価について：都市を追われ、山岳アジトを根柢地としての軍事訓練等を行なっていたけれども、それも発見されてしまい、仕掛けられた闘いとして展開されたわけであり、ゲリラ戦としては敗北的要素がはじめからあつた。しかし彼らは兵士としての訓練の点では非常に発達して

あり、常に冷静であり、内部の様子を表わさなかったということ、そしてゲリラ戦の鉄則である指揮官を殲滅したという点において評価できる。又、真の意味での死を賭した斗いは、全ての人民に衡岳を与えざるを得なかったし、とりわけ日本階級斗争に「左翼」から目的意識的に銃が使われたことは新しい段階をなすように思う。

オニに組織問題について：連合赤軍は軍事力学的側面のみ「野合」であるから党としての組織論は皆無に等しい。赤軍派と京決安保共斗には戦略的一致がなく、また深く追求することなく、ただ軍事によって結合したわけで、組織を維持するために軍事的エスカレートのみが行なわれたのではないか。レーニン主義的組織論に単純反発して、党建設を完全放棄している。それ故連合赤軍の一人ひとり同志的連帯と意志一致に水は党活動を媒介にしてのみ獲得される)がなく、非合法地下活動において同志さえも信じられなくなってしまったのではないか。と同時に、レーニン主義的中央集権制がなく、かわりに軍事的中央集権制(水自体は党指導を媒介にすれば全く正しい)のみで一切が決定されたのであり、ああいう結果になったのではあるまいか。

もちろん、連合赤軍の肅清は「スローリン肅清」とは本質的に違うと思う。スターリン主義の官僚的中央集権制は世界革命の放棄に基づく自己保身的なレーニン主義の歪曲形態であり、肅清は確固とした政治路線(一国社会主義論、官僚制etc.)に基づく反革命としてある。連合赤軍の肅清はもっと単純な理由(逃亡する、アジトがばれてしまう、意志が弱い、ヘマをやった、ブルジョア的行動をした)によるものであり、追いつめられた人間の異常心理状態によるものではないかと思う。

結論的にいうと、人間解放をめざす共産主義的人間の結集体としての党組織論の欠如と、それによる同志的一体性(プロレタリア的人間関係)の崩壊が原因であり、その意味で我々は大量から期待され、信頼される強固なレーニン主義的ボルシェヴィキ党を建設していかなければならない。

オニに、戦略・戦術の問題について：戦略は、世界同時革命論と毛沢東——一国社会主義論の野合であり、組織としての戦略理論が欠如しているのが一番問題である。又、大衆運動から全く逃亡的であり、「銃から革命が生まれる」という様な少数者だけによる蜂起で大量が革命に何うと思いつている。であるから、革命については語るが、それを保障する、民衆の気分を全く無視している。現実的にいうならば、それは、アジア侵略阻止、沖縄返還政策粉碎、自衛隊沖縄派兵阻止であり、釣魚台列島略奪阻止斗争である。沖縄入管・諸斗争の激発が日本階級斗争の内乱——内戦的死斗を保障する斗いである。

以上より、我々の教訓化すべきことをあげてみると、

- 軍事は無条件に政治に従属せねばならない。正しい路線によってのみ軍事的にも勝利しうる。(軍事は政治の継続である)
- 反帝・反スツ世界革命戦略に基づく鉄のレーニン主義的ボルシェヴィキ党を建設せよ。
- 組織問題に関する日和見主義は組織の腐敗につながる。
- 党としての斗いと党のための斗いの有機的統一を獲得せよ。
- 真の同志的連帯・思想的同一性は党活動を媒介にしたプロレタリア的人間関係の目的意識的追求によって獲得される。
- 大量をトコトン革命党に結集させよ。大量を組織し指導せよ。

我々は今回の連合赤軍事件が及ぼした影響については決して軽視はできないが、しかし我々の立場は飽くまでも日本革命勝利——人間解放でなければならぬ。つまり、マスコミや権力の操作に動揺することなく、何が真実なのか、何が原因なのか、何が間違っていたのか等々革命主体——実践者として検討してゆかねばならない。現実的には、破防法的、フレームアップ的、K=K連合的大弾圧と関係して分析し、内乱——内戦が不可避的なものとしてある現存に、る反革命側の攻害としてこの事件が利用されていることをとらえねばならないだろう。すなわち、この事件を評論家的立場ではなく、革命勝利

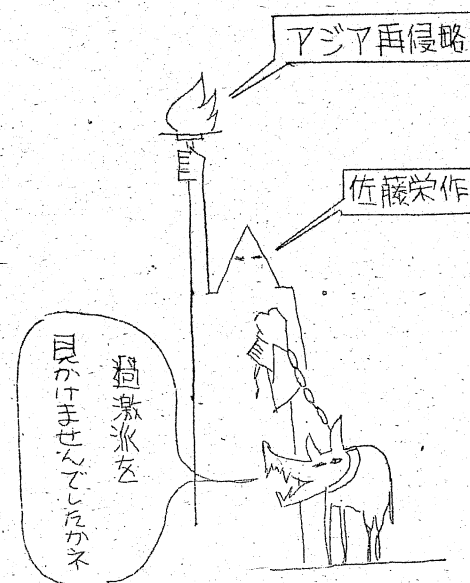
のステップとして受け取るべきだと思う。そうすることが、連合赤軍の一人ひとり(リンチされた人も含めて)に対する我々=革命を実践する者の礼儀ではないだろうか。

1972. 3. 26

中野刑務所にて

追伸

この論文は獄外にある同志その他の意見を参考にして自分なりにまとめたものである。



事実を直視すること

Y.H.(中野)

前略、獄中にいる者は、闘いなら逃げ去ることはできない。自己の存在そのものが日本の共産主義運動の一時吸一呼吸を自らの心臓の鼓動として感じ取らねばならない。あの目をそむけたくなるようなリンチ殺人も吐き気を感じながら見つめていなければならぬ。それを自らの問題として内い直すことなしにいななる解決も与えられないこととして。だが連合赤軍-銃撃戦とリンチ殺人は、それに前向きに生じた自衛隊の立上基地への強行移駐、沖縄への秘密裡物資搬入と考え合わせてみれば決して特異的なものではなく、むしろ両者はメカルの表裏でなく崩壊過程にある資本主義社会の矛盾の右と左の突出した両極性を示しているのだ。それ故あの事件は明らかに新左翼の内部に秘んでいた矛盾を直接的にむき出しに現わしているものではない。そしてまた虚飾に包みられた現実というものが我々にとって“吐き気”としてしな感じられない時、その現実をこそあらゆる憎しきをもって打破しなければならぬのだ。

闘いの退潮期にあって、人々は疲労し湯きぞしてさめ切っている。絶望と焦立ろと精神の荒療の進行は新左翼の中にあつたロマンティズムのニヒリズムへの転換過程の中で醸成されていく。ある者が連合赤軍のリンチ殺人について述べている。「彼らの心は荒療していた。仲間を殺してさらに墜落した。けれども今の世の中で同じ様な荒療はほくらの心の片端からなくならないのではないのでしょうか。」彼らの精神と余りにも重なり合う自分の精神に恐れを感じた者は少なくないだろう。彼らの山中での死の狂宴と斗いの方向性を見失い隊列なら去って行った者が大都会の重苦しさの中で屈辱的日常性を種いられしている生活との不連続性は背中合わせの連続性であり、同じ精神の荒療を分け持っているのだ。それは春の光の中で巨大なビルの部屋の片隅での事務仕事の最中突然隙間見る自らの心情の荒療が自らの屍を現出させその時自分の部屋の扉の後ろに殺された者達と並んでいる自らの墓場を発見する日常性における死の構造なのだ。我々の死は全て連らなっている。冷氣の中で身をよじらせて死んでゆく者達と議事堂を見下す三十階建の強制収容所の中で作られた空気を吸い、作られた此 でのものを見ている人々とは絶望と空虚さをはさんだサンドイッチのようにくっつき合っている。一方は権力に追いつめられ殺さ

他方は権力から生み出されている。日常性と絶望の構造こそ深く向
けねばならない。絶望な死に到る病いであるとしてもそれは特殊
なものではない。都市の人々には死に至る所その深淵をのぞかせて
いる。生ける屍としての生のみが許されている日常性の構造は殺人
すら一つの遊戯の中に解消されてしまう。生も死もその意味を剝奪
されている。

日常世界に貫くテロル支配- 路上で、アパートの窓で、山奥で、鉱山
で、工場で、都市で、農村で、漁村で、人々は何の理由もなく死んでゆく。山
と積み重ねた屍を前にして「御不運なことで」と言っではいけない。
重要なのは日常性の構造なのだ。日常性とニヒリズム、日常性とファ
シズムの構造こそ向けねばならない。日常生活の遂行という死の行
進。健全な市民生活を送っている善良な市民が死ぬ時、彼は明らかに
殺されたのだ。日常性という怪物に。善良さという怪物に。この巧
妙な支配形態、市民が自らの生活を遂行してさえすれば崩れない
体制の構造的柔軟性は政治的言語を飲み込んでしまう。

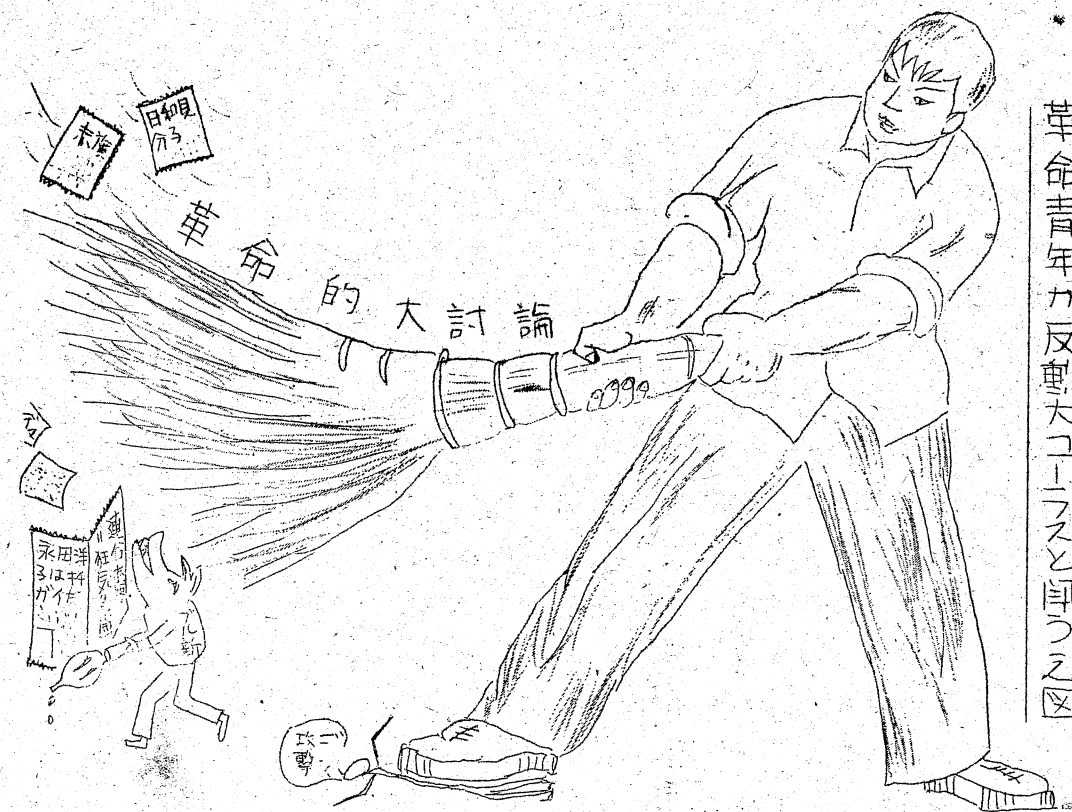
連合赤軍事件は、72年の政治状況の最も暗い闇、日本政治の暗黒
の位相を露き上ならせる。「今の時代を生きていることの恐ろしさ」
は、自らの崩壊への内的恐怖であり人間総体の解体の過程であり、
ファシズムへの外的警戒でもある人間の自己崩壊は日常性の中で意欲
を奪われた精神は、絶対的権威への拝跪へと津なる。現在の人間の
精神の荒廃が一つの特殊な立場で形成されるのではなく一般的な
日常性の場において進行しているということが問題なのである。日
常性という奥昼の盲目の中で至る所権力ははびこりこびりついてい
る。この中で人は自らの死と死者とに絶えず向かい合っている。歴
史の脈略を奪われ限りなく続く「いま」「ここ」に縛りつけられ自我を喪
失した者たちの革命へと羽ばたく意欲は空しくその中に埋没してゆ
く。日常性という湯いた砂漠の中の歩行は同質性の空白として人の
精神を自立した思考を蝕んでゆく。自らの意志を欠いた彼らはマス
コミの通り考え行動してゆく。連合赤軍事件における大衆の反革命的
熱狂の意味するものは何なのだろう。自らのすぐ側にひそんでいる
深淵の闇から目をそらすかの様に「パンとサーカス」をのみ求める
大衆の資本主義の崩壊過程への危機感、ファシズムとして噴出する。
一切は最悪の方向に向かっているということだけが鮮やかに我々の
目に映じそれ以外は全く暗闇に閉ざされている。

連合赤軍をスターリニズム、ナチズム、唯武器主義、軍事主義、
冒険主義、一機主義と批判したとしても何の解決にもならない。問
題は政治的方法論の枠内におさまりに切れない所にあるのだ。現在の
日本の状況と革命の現実性との着着の大きさをこそ向けねばなら
ない。その問題をいかにして埋めるのかを深く考え直し実践してゆく
以外にはないだろう。それには戦術、戦略といったことに包摂され
ない革命というものへの深い問い直しも要請されるだろう。革命戦
争は抗毒素であってそれは単に敵の毒素を排除するばかりではなく
自己の汚れを洗い清める」(モドロ) であり、同時に「革命とは人間
の精神力をむさぼり食う怪物のごときものである」(トロツキー) と
いうことなのだ。斗いの過程の中で人は上昇と下降の高揚と沈滞の
解放と抑圧の緊張の中に自らの身を投げ出し、その弁証法を体現し
てゆく以外にない。危機の時代、崩れゆく現状況で革命の弁証法を
同時に人間の弁証法として形成してゆかねばならない。崩壊過程と
はとりも直さず創造の過程でもあるのだから。

外の君いた光の蜃鏡では、獄中の虚しい闇を導き上ならせる。現在
の困難な状況は斗う者の魂に重圧を加えるものだろう。しかしそこ
なら目をそらすことはできない。いつでも出発点は今でありここな
のだ。全てを始めならやり直していこうとする努力と勇気が未来を
切り開くのであり、限りなく来る今の中で永遠の開始者として階級斗
争の戦略へのねばり強い把握を繰り返しながら、日本階級斗争の底
層的歴史から訣別し、現在の斗いの困難を同時に敵支配者階級の困
難性でもあるということにおいて斗いへの強い決意を燃え上らせねば
ならない。

リンチ殺人によるあの連日の墓掘は、新左翼の墓穴を掘っていたの
だろうか。いや、そうであってはならない。連合赤軍をあそこまで追
いつめた権力の弾圧は資本主義の矛盾の本質をも意味している。だ
がアルジョアジの支配の最も巧妙な形態、議会制民主主義が帝国主
義社会の矛盾を調節しえなくなっている現在、ファシズムの危機は迫
っている。70年以降斗う大衆の多くが戦列から召喚していった率態
こそが大衆から孤立化した左翼を形成し、それがもろに直接的に権
力の弾圧の対象となった状態を見てみるならば連合赤軍のファナ
リズムがプロレタリアートなきプロレタリア革命としてのノンラディ
カリズムから殺人にまで至ってしまったことの責任は、大衆全てに及

かってきている。より確実な大衆武装斗争が可能である歴史状況、斗争の進展が人民の間で形成されていなければ連合赤軍の犠牲はなかったであろう。革命を目前の途中に倒れた者はそれがどんな形で死んだにせよ権力によって殺された犠牲者であるのだ。歴史の必然的歩みとしての革命を阻止せんとする権力の弾圧こそ唯一の憎悪の対象なのだ。現在の我々の任務は死者への鎮魂歌を革命の真の力リズムを求めながら捧げることであろう。革命斗争の現実的未成熟性はそれを担う我々に、それ故に死なねばならなかった死者への贖罪への義務を課するのであり、それはまた全人民への課題でもある。彼らの顔面と没落を自らのものとして乗り越えることは全人民的革命斗争の高揚の中で極めて可能となるであろう。



革命青年が反動大コープスと闘う図

虐殺は政治・思想の軽視の結果 引き起こされた 佐藤隆信

――三湾での改編は、事実上わが軍の誕生であり、まさにこのときから党の軍隊にたいする指導が確立したのである。もしも沢東同志が、この根本的な問題を賢明にもま、さきに解決したのでなかったら、その軍隊は政治の魂や明確な行動綱領を終始もちえず、ふいふ型の軍隊の気風や農民の自由散漫な作風をあらためられず、その結果、たとえ強大な敵に消滅されなくても、諸方をあらしまわる賊にしかなりえなかった。

――もし党の指導がなければ、たとえ大量の蜂起農民があり、軍事的骨幹があつたとしても、部隊はやはり魂をもたない。政治上の改造をへなければ、蜂起した農民は組織性、紀律性が欠けており、すぐつぶされてしまう。政治上の改造をへなければ、軍事的骨幹は同時に政治上の骨幹となることができず、その軍事的骨幹としての役割も發揮しえない。党は終始軍隊の指導者であり、組織者であり、激励者であり、党の指導がなければ、革命の軍隊はない。党をばなればすべて失敗する。わが軍の全歴史はこの真理を十分に証明している。(星火燎原 — 中国人民解放軍 戦史)

上の2つの文章は全く今回の事件の原因の根源を指適していると思う。つまり革命組織(軍隊)が政治・思想を失えば墮落してしまい、斗争は失敗してしまう。(我々の同志、渡辺正則同志は「序章」7号の「南朝鮮ゲリラ戦士群像」には著者の経験から「銃火器というものは、使用するものを必ず墮落させる」と述べられている。私自身、握ったことがないので判らないが、これを使いこなすには、高度な政治・思想が必要で、これがないと銃にふりまわされ、反革命に転落するということだ」と思う。)と述べている。

以上、簡単ではあるが結論である。

毛沢東は、「我々が事物をみる場合には、その実質をみるべきであり、その現象はただ、人門のための手引きとみなし、ひとたび門内にはい、たならば、その実質をつかまなければならぬ。これが

たしかに科学的な分析方法である。」「事物の発展の根本原因は、事物の外部にあるのではなくて、事物の内部にあり、事物の内部の矛盾性にある。どのような事物の内部にも こうした矛盾性があり、それによって事物の運動と発展がひき起こされる。事物の内部のこの矛盾性は、事物の発展の根本原因であり、ある事物と他の事物が相互に連係し、影響しあうことは、事物の発展の第二義的な原因である。」と、われわれに教えている。これは今回の事件を分析する際われわれが絶対、堅持しなければならない科学的な分析方法である。外の同志(今回の事件の実行者)は「解放の旗」20号(日本共産党革命左派の機関紙)で政治・思想=反米愛国路線・米帝打倒、日本軍国主義打倒の重要性を切々と呼びかけていた。しかしわれわれの同志、渡辺同志によると、これは獄中の川島同志の手紙の丸写しとの事。これは当たっていると考えられる。なぜなら、外の同志の行動は言っていることとやっている事が全く合致せず、主観と客観の分裂、理論と実践の遊離の結果に見られるからである。毛沢東はこの事について、「理論と実践の遊離、主観と客観の分裂はブルジョア階級の観念論の世界観であり、左、右日和見主義路線の認識論の根源である」と、教えている。

主観と客観の分裂、理論と実践の遊離→主観主義
毛沢東は主観主義について次のように述べている。主観主義は共産党の大敵であり、労働者階級の大敵であり、人民の大敵であり、民族の大敵であり、党性が不純なことのあらわれである。主観主義がうちたおされないかぎり、マルクス・レーニン主義の真理は勢いをえず、党性は強固にならず、革命は勝利しない。主観主義的な指導は必然的に日和見主義か、さもなければ盲動主義の結果を生む。」と。外の同志は以上の大まかな分析から、主観主義→政治・思想=反米愛国路線の放棄→虐殺、蜂起の準備(盲動主義)、等と失敗したのであると思う。

ではなぜ主観主義に陥ってしまったのだろうか。毛沢東は主観主義の発生を防ぐには圧として、党員の思想や党内の生活を政治的にし、

科学的にするよう党員を教育することである。」と教えている。これによると、外の同志は政治・思想を重視していなかったことがわかる。これは毛沢東の教えによると、党性が不純なことを表わしている。

以上の点から、今回の虐殺、失敗、誤りの原因として、

オ1に、政治・思想の軽視(党性の不純)

オ2に、主観主義の結果

オ3に、反米愛国路線の放棄

ではないかと思う。

図式にすると、政治・思想の軽視(党性の不純)→主観主義→反米愛国路線の放棄→虐殺、一連の失敗、誤り。

以上の大まかな分析より、今回の悲劇は政治・思想の軽視の結果引き起こされたのであると思う。

今回のような悲劇を再現しないためには、党性の不純(政治・思想の軽視)をなくさなければならない、つまり政治・思想を重視しなければならない。(毛沢東思想の活学活用)政治オ一。

村関車が石炭を食べてはじめて力強く走れるように

我々も毛沢東思想を身につけてはじめて前進することができる

我々が真に毛沢東思想で武装したら百戦百勝だ

我々が毛沢東思想から離れたら失敗する

毛沢東思想を堅持してこそ日本革命は勝利、前進する

日本革命の勝利は毛沢東思想を離れてはありえない

さあ同志たち

勝利の赤旗 毛沢東思想を高く掲げ 前進だ!

70年代は我々革命家の手中にある！

岡地雄一(東拘)

この間、連日新聞をにぎわせた「連合赤軍さあぎ」も下火になりマスコミの気狂いじみた反過激派キャンペーンに日本中が踊らされた感が残る今日この頃ですが、我々、革命戦線の主体の側にあっては、むしろこれからこそ、あの一連の「事件」の総括の内容が問われていると言わねばならないと思います。言うまでもなく、今回の事件を一部の指ド者の「狂気」「残虐」とか「異常」性などということによってかたづけるのではなく、現在の日本の階級情勢の中に正しく位置づけ、そこから教訓を引きだしていく以外にはなく、そのような作業を全ての同志が真摯にやりとげていくことが課題として残されていると思います。また連合赤軍の諸君の闘いの評価すべきところは断固として評価していかなければならないと思います。それは、一つには「あさま山荘」銃撃戦や人民武装への一つの視点を提起したということです。彼らの不屈の闘争精神はあくまでも支持されねばならず、また一部に「期待」された自決などという小ブル英雄主義とは無縁であり、あくまでも生き抜いて、これから先、長期にわたる苦闘を自ら選抜したということは、革命戦争兵士としての気風を示すものといえるでしょう。しかし同時に明らかにしなければならないのは、彼らの闘いをもつて、「新しい時代を切り拓いた」との評価は、少し早計に過ぎるのではないかということです。我々は、今こそ、彼らの遊ゲキ戦論の誤りを明らかにしなければならないと同時に、現在、様々な語り口をもって語られている「軍事論」の再検討が問われているのではないかと思います。たとえば、それは一部の諸君が主張する帝国主義軍隊解体一打倒を革命の「正規軍」の建設によって対置するという単純発想の行きつくところが結局は唯武器論と軍事の一人歩きを生みださざるをえないという軍事過程論—「攻方の弁証法」への地判であり、同時に日本革命において、最も有効な軍事戦略論の相契であると考えています。それは決してクラウゼツィツや ホーグエン サッフや バーヨや マリゲーラの軍事論

ゲリラ戦の引きうつしでなく、まずオ—に我々の武装斗争を保証する階級的基盤の形成が前提とせられ、そのような闘いを抜きにした武装斗争は非動隊との先端攻防戦の中で物理的に壊滅させられることは必然であり、ましてや武器によるエスカレートでブルジョア軍隊と対抗しようとする事自体が、現実の階級関係を正しく認識していないことの証左であり、必然的にそれは玉砕路線が軍事空論主義への二つの道いすれかに転落するということなのです。あくまでも武装斗争と大衆斗争は、同時に展開されねばならず、どちらか一方が先行するものではないということです。このような観点に立ったとき、大衆武装斗争の創出こそが、火急の任務として問われているというべきではないでしょうか。そして、我々は、この一つの例を三里塚斗争においてみることができると思います。すなわち、武器はたとえ石や竹ざおでも、こちら側の、つまり人民の側の陣地で闘っているかぎり、勝利は可能であるということではないでしょうか。この陣地とは、地理的なものだけでなく、先に述べた、我々の武装斗争を保証する階級的基盤ということなのです。いうなれば「天の利地の利、人の利」といったところです。

さて、さらに彼らの闘いにおいて評価されなければならないのは、赤軍派と京浜安房共闘が戦略論の不一致を越えて共同の軍事行動を追求せんとしたということではないでしょうか。もちろん、そのために、あまりにも苛酷な闘争を生みだしてしまったことは、残念でありませんが、少なくとも現在、新左翼諸戦線が深い混沌の中にあって内ゲバに明け暮れているとき、この連合への試みは貴重であると思います。たしかに一部には、この連合を決定的な誤りであったとする意見もあるようですが、ぼくには、現在、諸々のセクトが自己目的的に「内ゲバ」を展開しているとしが考えられず、その中にあって、対権力という視点での連合は評価されるべきだと思います。なぜなら党派斗争とは、あくまでも権力斗争を前提としてしか成り立たず、現在の権力斗争を忘れた「内ゲバ」は、新左翼の悪しき体質として止揚されるべきだと考えています。ましてや、現在

大猿の仲と評されるある二つのセクトの「死斗」(?)に至っては、
権力斗争からの逃避の合理化としか考えられず、今こそ党派斗争の
「別個に並んで同時に撃つ」という原則を確立すべきではないでは
うか。党派斗争を断固として斗い抜く、ということと、他セクトの
壊滅に血道を上げるといふことは、あくまでも異なるのだという
ことを全ての同志が確認する必要があると思います。このような視
点に立って、今回の斗いが連合赤軍の斗いであつたということ、
大きく評価したいと思ひます。

また今回一頁、明らかになったことは、今さら言うまでもないこ
とですが、日本共産党の完全なる御用政党への転落の露呈であつた。
と思ひます。国会答弁においても、「連合赤軍とは無関係」である
ということの表明に終始し、はては日帝政治委員会、佐藤栄
作に「日本共産党はリッパな政党であり、連合赤軍と関係がないこ
とは皆が知っている、もっと自信を持つがよい」(読売新聞)一
など、遂に、はげまされる始末である。もちろん、我々、革命戦線
の側にあつても、日本共産党とはなんの関係もないことを、もっと
誇りに思っているから、あつこではあるのだが、少なくとも、反帝
国際主義を立場とする者は全て、今回の連合赤軍に対する権力の攻
撃に対しては、断固とした態度をとらねばならず、彼らに対する弾
圧は等しく革命戦線に対する弾圧として反撃をしていかねばならな
いことは明白である。たしかに、自民党というしょになって「火災
ビン立法」の画策に生きがいを感じるような社会党や共産党のよう
な人民戦線派に何かを期待するのが無理ということであるが、しか
し、「新」左翼と言われる諸君の中にも今回の「事件」を「小ブル
急進主義の当然の帰結」などと言つて、悟りすました顔をしている
連中がいるということは残念なことであると言わねばならない。そ
れは、銃撃戦の段階で、元気よく、断固支持の声明を発したにもか
かわらず、内部の「肅静」が明らかになるや、とたんに沈黙を守り
続けている諸君においても同じであり、あくまでも、革命戦線の
内部における誤りは誤りとして、認め、それを克服していくことが

問われていると言わねばならない。なぜならば、最初から、なにか
しら完全な戦線がつくられてゐるのではなく、多くの誤りを繰り返
しながら、自らの弱さを克服していく以外には我々の道はなく、ま
た、そのような苦斗に耐えることができる者のみが革命戦士の名に
値するのだから。

だが、ここにおいても残念なことに彼らの中にも自供をする者が
出てきているとのことである。もちろん、商業新聞のことであるか
ら全部を全部信用するのではないにしても、ここにもまた、一人一
人の活動家の弱さが露呈してしまつたように思われる。又、詳しい
ことがわからないので、推断はさけるが、自首をしてくる者がいた
との報には、我々主体の側の弱さを思い知らされた気がした。少な
くとも、「我々は権力に裁かれるいわれなどないのであり、」歴史
は必ずや我々に無罪を宣言するだろう。」確信を今一度、全ての同
志諸君と確認しようではないか。我々の戦線の誤りは、何度も繰り
返すが、我々の手によって克服する以外にはなく、ましてや、安ぼ
い小ブル・センサメンタリズムなどは、ブルジョアジーの歓迎する
ものではあつても、革命戦線にとっては百害あつて一利なしとい
うべきであらう。今、我々には、現実を現実として、正しく認識
する強い精神が問われているのであり、それに耐え切れぬ者は、
こそこそと逃げ出すしかないのである。もちろん去る者を追ふ必要
もないわけである。今や我々の斗いは一ウツが絶対に負けられ
ない斗いとしてあるのであり、「今日の敗北は明日の勝利。」などと
いう政治的ロマンティズムが通用しない時代なのだということ
を一人一人が確認しなければならぬ。このような時代にあつては、
一切の日和見主義や空論主義がその破産を宣告される時代である。
と、共に、我々の戦線の矛盾が鋭く顕在化してくる時代でもあるだ
ろう。しかし、どうやら、現在の戦線の混迷はここで考えている以
上に深いようである。それは現在の政府危機を今一步追ひこめない
我々の弱さであり、低迷であらう。まず、このことを痛苦的現実と
して、目をそらすことなく見つめなければならぬ。たしかに、自

民党政府の動揺は商業新聞をもってして「長期政権にあぐらをかくた」「トカゲのシッポ切り内閣」などと言わしめるに至っている。それはまた野党においても同じであり、この間の与野党の協調政策が立川基地自衛隊強行移駐を許し、沖縄自衛隊配備を推進し、刑法改悪・保安処分を画策させていることは、誰の目にも明らかである。このような国内における治安維持政策による革命派の徹底的弾圧と、それを背景にした、遠くはマラッカ海峡までをも射程に収めた対外侵略の野望は、日本帝国主義の本領発揮と、皮肉なことに、それがための帝国主義者の危機の進行でもあることを思いしらせてやらねばならない。我々にとりては、「四次防予算」が政府修正か与党修正かなどという茶番や、沖縄へ自衛隊物資をめぐり移送させたから、「本土」へ引きあげるかあげないか、などということとは、何ら本質的なことではないのである。問題とするべきは、日本帝国主義の存在そのものであり、帝国主義者を「左」から援助する人民戦線派をいかに粉砕するかということである。決してそれ以外ではありえない。また見落してはならないのは、今回の連合赤軍「事件」で、あたかも一部の指導者が「精神異常者」であるかのごとき、マスコミの報道である。これこそはマスコミが保安処分への道を掃き清めるばかりか、正しい道にもその道に、ジュータシまでしているのだということである。このような官憲・マスコミ一体となった反革命の嵐の中に、断固として、我々革命派の旗をうちたてなければならぬ。もはや紙数もつきたので、簡略に書くが、まず第一に官憲の弾圧は現在より以上に強められるであろうということ、そしてそれに対する反撃は全ての反帝国主義を立場とする者の任務であり、もはや、一步も退くことはできないということである。そして現在、三里塚では空港そのものの粉砕にむけて鉄塔が建設されているときく。また沖縄でも「返還＝日本帝国主義への組み込み」を見抜いた多くの人民が決起している。たしかに沖縄返還とは、日本帝国主義の領土獲得のことであつたし、当初から、我々は、そのことを主張しつづけてきた。今、我々はそれを許すのか、許さないのか

ニフに一つが向われているのだ。全ての同志諸君！今こそ進撃の時である。政府危村を政府打仆へ追い込め！ 70年代は我々革命家の手中にある。

獄中の同志諸君！「外」ではアバート・ローラー作戦なるものが展開されているという。人民によって人民を監視させる、日の丸・コンピュータ・ファシズムの到来である。だが何も恐れる必要はない。勝利は我々のものである。きたるべき戦線復帰の日にはえて、十分な休養と栄養の摂取と、そして理論的武装をなしてあげておこうではないか！（反論を待つ）

参考資料のページ

共産主義者同盟(RG)「赤報」特別号より '70.3.23付

五人の連合赤軍による山荘への立てこもり、警察との銃撃戦は、日本階級闘争における最初の銃撃戦として聞かれた。(秩父事件等は経済闘争)当初から計画されたものではなく、追いこまれたの銃撃戦であつたとはいえ、10日間を圧倒的に優利な敵に対して全く沈黙して押し返し、徹底的に非妥協的に闘い2名の敵を殺しく1名は久松の隊長)12名の敵に重軽傷を負わせ、日本革命戦争を大きく前進させた。――

政治警察の攻撃が連合赤軍をして戦いを選ばず、戦わずして倒れるかの岐路に置いたとき、彼らは戦いを選びたった五人で一人質をとったとはいえ)80人の警察を相手にして10日間もちこたえ1億円の金を支出させたのである。もし彼らが戦いを選ばなかったら、連合赤軍の組織的壊滅ということだけで終り、この場合の労働者階級の意気沮喪、革命的左翼の混乱は、はるかに大きな不幸を招いたであろう。彼らが闘いを選んだからこそ、労働者階級は革命戦争の遂行のための貴重な教訓を手にすることができたのである。

日本における革命戦争は、爆弾の使用から、さらに銃火器の使用にむかっているし、むかれなくてはならない。階級対立の非知解性

徹底的に批判し教訓化せよ

前略

牧田和美(囀)

連合赤軍の件は、獄内において、唯一ブル新によって知らされた。その反動的にワイ曲された文章から、事実を知るのは困難だが、その後差し入れられた新聞紙、パンフから少量にしても真実が得られたのは幸であった。まずオーに彼らの行動が、権力によって、圧倒的に、マスコミキャンペーンにより利用されたことに気づく。テレビ、ラジオなどは知らぬが、ブル新によるその反革命報道は、権力の走狗と化したそのものであった。昨年末、三里塚反対同盟青年隊にかけられた「殺人犯キャンペーン」より露骨になり始めたブル新の反動報道は、14・14マルキ殺人を通じ、極に達しているといえるのではないかと。過激派攻撃から新左翼＝過激派＝狂気集団とまでエスカレートした報道は権力によるローラー作戦と結びつき、都市からの新左翼総体のあぶり出し、孤立をうかがっている。各々の自警団の権力による組織化とともに、左翼＝非人間＝犯罪者とのラグ印を押し、地域住民のスパイ行為の強要をもって、中核派にかけられた破防攻撃と相重なり、恐ろべき弾圧体制をかけてきている。今こそ我々の権力に対する大衆的反撃が必要とされているのではないかと。連合赤軍浅間山荘蜂起にしても、この事件を全く政治的なものから切りはなし、単なる狂気集団のもの、とキャンペーンをはっている。連日のブル新・週間誌の記事は、全く、ハキ気をもよおすものである。

しかしながら、内部でのリンチ殺人事件、蜂起の敗北を冷静に見つめた場合、アロレタリアなきプロレタリア兵士、党なき軍のその冒険主義のあわれな帰結という感をまぬがれない。しかし今、我々にとって必要なのは、日共民青、革マル派諸君らのように、この事件に目をつぶり、ヒステリックに関係ないものと見なすことではなく、徹底的に批判しつくし、その銃撃戦・他でのアラスの面を、

いく分なりとも、肉体化し、教訓化することが必要なのではないかと。ともすれば、遠くからながめ、精神的マスターベーションにふけり、安易に支持する心情派的態度をいましめねばならぬであろう。これこそ、連合赤軍の戦士諸君が身をもって教えてくれたものの一つではないだろうか。最後に、殺された反革命プロフェッショナル軍幹部隊員らには、一片の同情の余地もない。

P21より

はますます深化しており、帝国主義者は一歩一歩アジア侵略、反革命戦争にむかって進み、賃金奴隷としての労働者階級の憤怒はますます強まっている。この情勢の中では政治闘争の問題は革命戦争として考えられなくてはならない。

帝国主義国家権力は資本家階級が労働者階級を賃金奴隷として抑圧しておくための暴力組織であり、労働者階級はこの帝国主義国家権力を暴力革命によって粉砕、破壊打倒し、プロレタリア階級独裁権力を樹立することによって、賃労働制の廃止の実現に向いなくてはならない。

(中略)——内部問題について——…すなわち、銃撃戦の進行そのものを目的として結集した連合赤軍は、政治目的を明確化することによって意志統一して銃撃戦を行うという考え方ではなかったから、勢い「死」を抽象化して考え、銃撃を扱う個人々が「共産主義化」することによって「死」の恐怖を克服した人間になりうると思った。そして「共産主義化」の度合いをはかってゆく基準は、極端な規律厳守に求められ、個人々が規律を守りうる人間になることが、個人々の「共産主義化」であると考えられたのである。「共産主義化」論は革マル派の「党とは永遠の今」などという観念論とは質を異にしており、党規律、軍紀に基つまるどころの、非常に具体的、実践的性格をもっているのである。……このように水平主義と個人主義とが裏返しに結合した「共産主義化」論からは、規律に不満を言ったり、この規律を守らないものは「共産主義化」を志さない人

間であり、「共産主義化」できない人間であるから全くの反革命であるとして一人残らず断罪されていく傾向が必ず発生する。――

問題は、なぜ次から次へと脱落者を出さざるをえなかったのか、なぜ大量逮捕の後に完全黙否が破られ、転向者が出ているのかというところにあり、組織防衛の観点から行なったはずの処分が組織防衛につながっていないことにある。――

スパイ問題として宣伝されていることに関しては我々は少しの情報しか持ちあわせていないが、連合赤軍の内部粛清はむしろ軌道を失った者、脱落者に対する組織防衛の観点からの処分であるようだ。この作戦のような戦闘に直面しているときスパイを見つけて殺すのは全く正しい。またスパイでなくとも敵との戦闘に入っている際の敵前逃亡者は処殺しなければならない。

だが最も問題なのは「スパイをすべて殺すことではない。スパイがいても組織が防衛でき、秘密を維持でき、かつスパイを摘発しうる組織」ということであり、このことは何よりも党内闘争の徹底した組織化によって様々な政治的傾向というあいまいの混在を階級的観点からより分けうること、敵性論理とそうでないものとを区別しうることである。――連合赤軍は「鉄砲」を美化することによって、そもそもの非法党組織の建設から離れて共同生活し政治的意志統一を「共産主義化」に求めたために、規律を守っていれば党内闘争は起りえないということになり、（実際は党内闘争を組織しうるということ自体重要な規律問題なのだが）脱落者が組織のどのような弱点にもとずいて形成されるのかを総括する組織的保障をもちえず敵性論理を持ちこんでいる者と、そうでない者とを区別して処分し軌道する者を教育し、再び団結を固めてゆくことができなかったのである。「共産主義化」という考え方は資本主義社会という基礎の上に立って共産主義的人間関係の成立をとき、そしてその契機を規律に求めることになるのだがこのような思想は資本主義を美化している。

共産主義運動は、現に存在するブルジョアジーとプロレタリアー

差別、抑圧された人達と共に

東塾 順子 (東柊)

今回の事件に関しては、言い知れぬショックを受けた一人です。入ってくるニュースが限られた、しかも権力からの一方的な不十分なものであることを前提として思うことを書いてみます。

1. 世界同時革命を唱える赤軍と、毛沢東主義の京浜安保共闘の理論的な統一なしの連合軍であったこと。

2. 国家権力のアパートローラー作戦などによる凄まじい弾圧の中で山岳アジトにまで追いつめられていったこと。〈だから、私達は何よりもまず、この権力を弾劾しなくてはならない〉

3. 軍事について 党を軍の中へ解消してしまうという彼らのやり方は、正規軍の確立、大衆団体の自衛武装からプロレタリア人民統武装をなし遂げるという革命党の任務を放棄している。その為に、自ら大衆との接点を断ち切り、権力の包囲・せん滅にあってしまった。M作戦にしても大衆の中に根ざし、一人一人に訴え、新聞紙を売り、そして本当に大衆の支持を得て資金を獲得するという根本的なことを放棄したやり方だ。

以上の点をふまえて、今回のリンチ事件をみると、現在日本には生きる、という最低限の権利さえ奪われている数多くの柱田中国・朝鮮人民がいる。石川一雄氏にかけられた攻撃の如く三百万人の部落民になお苛酷な差別が行なわれている。若き青年が結婚・就職と厚い差別の壁の前に、毎年命を絶つてゆく姿がまだ後をたたない。多くの人民大衆が自らのギリギリの状態の中で闘いぬいている。

私達は全人類の解放という偉大な目標を掲げて闘いぬいている。水平社宣言の中に「人の世の冷たさが、どんなに冷たいか、人間をいたわることがなんであるかを知っている」という言葉があります。最も抑圧され、差別されて

いる人間の苦しみや怒りがわからない、理解しようとしないう人間解放なんてあり得ない。彼らが本当に部落民や在日中国・朝鮮人民のことをどれだけ考えていたか、かなり疑問に思う。「粗食を食べるのも兵士としての訓練だ」という言葉の中に、本当に毎日三度の食事にさえ事欠いている人々の苦しみが、わかっているのか。〈もちろん私も差別者であり、抑圧者である限り、決して自らの痛苦的な自己批判なしに言えたことではないが〉

追いつめられた山岳アジトの生活は、何よりもお互いの規律が必要なのは当然です。〈男女の関係、日常生活... etc.〉 けれども男の女の問題は真に人間的な問題です。それを道徳的な問題にすりかえてしまったりしてはいけません。私達は全く腐敗したブルジョア社会の中で男女の関係が歪曲されて語られている。真のあるべき姿が今の社会の中では全く歪められてしまっていることを私達の斗争の中で、男と女の真の関係を獲得・形成していかなければならない。

お互いに明確に反革命と判断したわけでもないのに殺してしまうことは、たとえ「総括」などという言葉を使おうとも犯罪的だ。私達が反革命を抹殺するのは、深い悲しみと限りない憤りがあってこそではないか。人を、それとも仲間を、自分の肉親を、夫を、恋人を殺すことによって(反革命でもないのに)思想性を問うなどというのは愚かな行為ではないか。決して、みせしめ、制裁であってはならない。脱落者が出そうになれば何故もっと全力でもってオルグしないのか。何故、その人間の犯罪性を追及することからやり直さないのか。人間性が全く奪われてしまっている社会だからこそ、私達は誰よりも人間性豊かでなくてはならない。(お互に寛大にせよ、という意味ではない) 彼らが、浅間山荘で本当に権力の毒まじい攻害の中で、命を賭けて闘ったその姿を思う時、何か言い知れぬくやしさがこみあげてくる。

権力・ブルジョアマスコミは、この事件を利用して毒じいキャンペーンを繰り広げている。けれども日帝のアジア侵略は国会でも暴露されているように、

着実に押し進められている。5・15が目の前に迫っている。私達はショックだ、などと悩んでいる余裕はない。勿論、今回の事は、きっちりと総括しなければいけないが、今こそもっともっと前進しなければならぬ。

余りにも悲惨ではあったが、私達には教訓であった。今回流された14人の赤い血を決して無駄にすることなく更に大胆に進軍しなければならぬ。それが私達の唯一の任務だ。

現状、権力のすさまじい弾圧の中で幾人かの者が屈服しかかっている。はっきり、彼らの破産のあらわれだが、断じて屈服することなかれ！ 彼らが屈服することが、あの14人に対する回答ではない筈だ。誤まりは誤まりとして、自らが生命を賭けて革命に投じたことを忘れてはならない。私達は彼らとは思想も組織も異なるが決して彼らだけの問題ではないと思う。彼らの誤りを徹底的に批判すると共に、今後の私達の前進への力となさなければならぬ、と思う。

革命のイメージ

茨田 勝丈
(中野)

革命のイメージ

それは底抜けに明るいものだ

革命の心

それは誇りであり、誠実さであり、優しさだ

われらは何をめざしているのだろうか

それは搾取なき社会、階級なき社会

われらは何が欲しいのか

それは人間の解放 人間の自由

いまいちど原点に戻らなければならない

わがらは重なる誤りを犯している
「それは手段であるはずの革命が、いつしか目的になっている」という事だ
革命至上主義——そこから心の荒廃が始まった

「革命のためならば」が都合のいい合言葉になった

そこから最も嫌うスターリイズムが誕生した

ロシアの誤ちが、いまくり返される

「粛清」——ここからは何もよいものが生まれなければかますます悪くなる
一方だ」

我々が人民大衆はいま沈んでいる

「粛清」の悲しみにうちひしがれている

今こそ前衛は大衆の心をつかまねばならない

前衛は大衆の心と共に歩まねばならない

「粛清」が投げかけた問題

それは革命者の心だと思う

前衛よ！ そのことに答えきって欲しい

それが人民大衆の願いと思う

革命の心

それは誇りであり、誠実さであり、優しさだ

革命のイメージ

それは底抜けに明るいものだ

「悲劇」についての若干の意見

松田 久(東狗)

獄中にあり、局外者であるというくやしき。にも拘らず伝えられる
悲劇＝革命の暗黒が自分たちの無力さ無能さとヌタと犬どもがあいづ
めた結果だという冷徹たる現実、事実。何故、僕は、そして僕たちは
あれだけ多くを語りつつ、このような悲劇＝革命の暗黒を未然にくい
とめることはできなかったのか？

日々闘っている人にとってもはや論外と言われるかもしれない。し
かし僕は自分がいつ、どこにいても「赤軍兵士」であることに誇りと
責任をもつ。日本における社会主義革命戦争は長期にわたり犠牲にみ
ち残酷な一面をもっていると考えられていた。その通りだと思う。な
んでこんなことでひるもうか？ 森のオヤジさんたちの革命の「生」と
死んでしまった同志たちの「死」をしっかりと受けとめ、うけつがな
いなら、ヌタ供が笑う、革命がなく。

ひとびとよ、我々と同志たちの言葉にどうか耳を傾けて下さい。敗
北から、悲劇から暗黒から逃げないなら勝利はどこにあるでしょうか。

僕はこの悲劇が伝えられはじめたころ「銃撃戦」を「絶望の淵に咲
いた仇花」と思いました。しかし絶望のなかからあのような銃撃戦は
戦えたでしょうか？ 泰平さんに対するあのような対応、敵に対する戦
い方、団結は絶望から生まれたのでしょうか？僕は彼ら五人がなにより
もそこに真の敵を見出したことによって、真に闘うべき敵がいたこと
によって、あのように戦い抜けたのだと思います。それが血の池に咲
いたハスの花であつたとしても血の森に咲いたクナナシの花であつた
としてもそれはやはりすばらしい戦いだったのです。悲劇と銃撃戦は
表裏一体をなすものですが。

上野勝輝兄の「赤い火をもやそう！」を読みました。断乎「要議ナ
シ」です。とりわけあの「⑤マルジョワジーがにくい」の立場に
立って自己批判と総括はすすめられねばなりません。ここでは上野兄
の主張に依拠しながら僕なりの意見をのべてみたいと思います。

① 悲劇の根源について

① 統一赤軍の合同。 醜悪なマスコミ、あるいは僕ら内部にも、思想的、理論的に異質な日共革命左派と赤軍派が無理矢理組織合同しギクシャクし合い、マサツを起したためという意見がある。確かに結果的にみると（マサツの情報から判断するしかないが）7.15「連合赤軍」結成の段階から、年末からの統一党組織結成に到る飛躍が直接的原因として矛盾を拡大したともいえる。また、俗物的競争心が働いたかも知れない。しかしそれはやはり結果論にすぎない。理論的に相違があったとしても思想的に相違していた訳ではない。思想性とはまずなによりプロレタリア階級性なのだから。階級的実践において同一ならば強固な統一戦線によって団結をかちとるべきだ。統一党組織結成の時期や具体的方法については僕には判断できない。だが団結がまちがったのではけっしてない。団結はより強固に兄弟的・同志的団結をかちとるべきであった。これも結果論的にいえば、正しい政治・思想・組織・軍事路線をもつてすれば、統一党組織結成は強力な武器となり、新段階を画したろうとくやまれる。とにかく、地下革命武装勢力はより強化・発展すべきです。

② 森同志ら指導部に対して。 上野兄に僕が唯一反対するとすれば、それは森同志の評価についてです。（しかし上野兄は④でそのアイマイさを克服しているので反対する意味はなくなったのですが）ところでもしこの悲劇の根源を指導的同志たちの個人的資質に求めるなら、それは最も容易な、最も醜悪な、最も重責を裏切るものです。僕は森同志を「オヤジさん」とよびます。森のオヤジさんは僕の最も敬愛する指導的赤軍兵士です。同志坂東についてもしかりです。僕の知る以前の過去がどうであれ、同志森はマンド内党内闘争の過程で脱落したことを自己批判し、ビラまき、ステはり、オルグ等活動家としてのイロハから再起して活動し、指導的立場に立って以降は赤軍の過去の栄光を背負い、必死になって戦い抜いたのです。すばらしい同志です。すばらしいオヤジです。マスコミによる悪意ある報道によって同志森、同志永田が欠陥人間、精神病とののしら

れているがそれはとんでもないことだ。彼らがすばらしい革命兵士であったがゆえに僕はそれでも抗し難い必然性を強烈に感ずる。同志森同志坂東を知っていればいる程、およそ考えられない悲劇なのだ。オヤジたちは生命をかけて本当の真剣な“総括”をなしとげるだろう。日本の、世界のプロレタリア階級のために余りに悲劇的な自らの、革命の「生」をその“総括”として残すだろう。僕はオヤジたちの革命の「生」と死んでしまった同志たちの「死」を赤軍兵士としてうけとめうけつぐ。そうでないなら自分の無力さ無能さが故にオヤジたちをそこまで追いつめたという現実を目をつむることになる。では一体抗し難い必然性とは、根源とは何であるのか？

③ ④ 都市から山岳への撤退と銃（軍事）を使いこなせなかったことについて。 悲劇の根源について考えてゆくと都市から山岳へ撤退したということが非常に象徴的なものに思えてくる。それは敵のアパート・ローラー作戦、全国四万以上の赤軍を動員しての一斉ガサ入れ検問攻勢に対処しきれず防御においつめられた結果である。そしてそれは組織・兵力の過度の集中を生み、プロレタリア視界に入らぬ閉鎖主義が極限化し、軍事技術主義、悪しき経験主義に陥り、銃の革命規律が没階級的、唯軍隊的規律になり、敵・友・味方がみえなくなることから脱落が始まり、それを機密保持・組織防衛ということに「たえざる限りなき同志愛」を歪曲された「たえざる限りなき不信」に変えたと思える。昨年の8月に元同志二人が東京と千葉で追跡・殺害されたということも伝えられているが、それ程のことができるのに何故都市を放棄したのか、あるいはせざるをえなかったのか、僕は実に不可解だしやりきれなく思う。何故そうなったのかその直接的分析は同志森たちの総括をまづしかしないけど僕らは僕らなりに背後から側面から分析しなければなりません。結果的にみても（結果論にも二種ある）我々の組織主体が銃（軍事）を使いこなせなかったと結論できる。獄中の同志たちは同様に組織主体の危機を感じていた。僕も「問われていることは前哨的ゲリラ戦からゲリラ革命戦争への飛躍が、火遊びへの墜落かである。」とは考えていた。銃を手にしてしっかり握らないなら

ばケガをするしヤケドをする。個人で手足の一本や二本失ったところで大したことないかもしれないが組織のケガ、ヤケドはなおりにくい」とは考えていた。銃を手にした時から敵との実質的な戦争状態が始まり、その緊張関係は組織内に反映する。組織内の矛盾を正しく処理するには、組織的、政治的に成熟していなければならない。だから根源は、政治、軍事路線の問題なのです。そのうえで規律等の組織内矛盾止場のための戦術・方針・方法を検討しなければならないのです。ここでは銃を扱いきる主体の階級的・政治的未成熟が悲劇の根源であることを指摘するにとどめておきます。

② 悲劇の歴史的・階級的位置

④ 歴史的立場 上野兄はこの問題を原則的に正しく指摘しています。「日帝は狂いはじめであり「く反動の嵐」は増々ひどく」「政府打倒、国家権力粉碎の偉大なく権力闘争」を求めは始めている。」……闘争主体としての歴史的立場という視点からこれを見ていこう。「現代の眼・3月号」に二つの印象的な文章がありました。一つは須藤久氏の「映画よお前は誰のために」、もう一つは題は忘れたが三里塚、戸村委員長の「大竹ハナの裏切り」に関するものです。映画監督須藤氏のは「歴史よお前は誰のために」と題する部落解放運動を題材にしその発展のために製作された映画を、関西マンド主催で同志社にて上映しようとしたのを中核派が上映阻止したことに關する文章です。須藤氏にとって関西マンドより中核派の方がずっと親しく、まるで兄弟同様の仲の友人（同志たち）が多いという。そういう兄弟たちに対してゲバ棒をふるったり、なぐりあったりしてまで上映する気はない。しかしどうしてこんなことになるんだと自問し、中核派はじめ革命家たちに問いかけている。紙数もないので詳しく書けないが、ひょっとしたらありきたりの動揺なのかもしれない須藤氏の文章が妙にひっかかって思い出される。戸村さんに関してはこの大竹ハナの裏切りについて様々のところでその趣旨を発表しておられるので、改めてその内容は書きません。反対同盟にとって老闘士小川明治氏の墓あばきを先導した元婦人行動隊副隊長大竹ハナの裏切りはたえがたいものであっ

たと思う。それは単に反対同盟だけではない。日本の革命战士们全てにとってくやしいことだ。三里塚は去年9月の決戦で3人の犬どもを殺した。大木よおさんのような素晴らしい革命婦人を生んだ。だが一方で敵は青行隊中心にメチャメチャな逮捕、拷問を展開し、三の宮君は自殺し、大竹ハナを生んだ。我々はこの公然たる変節、スパイ＝大竹ハナに対して今は無力である。（しかし戸村委員長の言うように過去数年間の闘いは未だ序の口なのだ。前途は洋々としていると考えるが）

内ゲバは多くの批判をよそにいよいよ激しさを増している。須藤氏の豊稔した事件なとほんのささやかないさごとといわれよう。また、読売新聞の投書欄には「私は渋谷中村刑事署しく11.14の中核の渋谷暴動のこと」の時、学生たちを尾行して警視庁監獄をもらった」と自慰する一般「市民」が出てきたのである。「市民」という名の公然隠然たるスパイたち。あの不可解きりまる「朝霞自衛官殺し」事件、全てが陰謀ではないとは思えるが警察組織が「滝田追跡」等で超大なフレームアップ体制を働いていることだけは確かだ。国家権力の謀略がうごめいている。

これら全ての極限の象徴に「聯合赤軍」の悲劇が位置する。それは単に日本の革命の悲劇なのではない。アメリカ、B.P.P.の分裂があのように悲しい事態になっていることは、全世界のとりわけ先進帝国主義圏内における革命派がぶつかっている壁がひとしく共通のものであり

その最も否定的悲劇的結果がこの悲劇なのだ。

日帝は四日市、鹿島と完全に破産し自然と人間と工業と農業の調和的發展など帝國主義ではありえないことを宣言されたにもかかわらず、今も「むつ小川原」「新大隅開發」らの巨大コンビナート構想を進め「新全総」「全国新幹線化」「全国パイプライン結合」と人民の精神的、肉体的荒廃をもたらし、自らはヌタのように悪性膨張している。日本のみではない。「韓国」、フィリピン、インドネシアの森林、林業を破壊している。それらに対する人民の怒りの反撃は様々の細流をなしているがもどかしいがそれは個々に分断され、革命主体はその怒りをストレートに激烈に表現しようとしている。日帝の悪性膨張、破壊、荒廃、反動の嵐のうずまきの中にく革命の暗黒＝悲劇の歴史的位

④悲劇の階級的位 置 悲劇に対して、同志たちに対して、背後からものをいうのはつらい。しかしいねばならない。上野兄もいうく我々は極左冒險主義であつたのか／しかりと。僕たちは「武器の要素第一」でなく「人の要素第一」を訴えてきた。しかし我々は結局極左冒險主義でしかなかったし武器の要素第一でしかなかった。それは「人の要素第一」をよくわかっていなかったとか、個人的資質の問題にするわけにはいかないことなのだ。毛沢東同志やホー・チ・ミンおじさんやカストロ、ゲバラ同志たちの言う「人の要素」となんとそれは違っていたことだろう。

金日成將軍のもとに學んでいる人のハイ・ジャック「F」の同志たちはそれらのことをもっともいち早く徹底して学びとり総括していた。世界を具体的に学びはじめた時、自らの小ブル性は明白であつたのだ。H-J「F」がとびたつた直後からの我々の第二次綱領論争は元年6月の敗北をもって挫折し閉鎖主義に傾斜し「軍の中の党、党の軍化」は結果的にはその閉鎖主義を追認する形となつた。かつて毛沢東同志は抗日統一戦線を提起了た時それを否定し党の純粋性を守ろうという閉鎖主義と徹底して闘った。閉鎖主義は党の純粋性を守るものでもなんでもなく逆に小ブル思想だつた。この悲劇の階級的位 置はそのような小ブル思想をプロレタリア階級性で克服できなかったことにある。小ブルのヌタ俵に対する憤激がマルクス・レーニン主義思想で組織されたのではなく、銃を媒介にして小ブル思想の泥沼にはまりこんでしまつたのだ。だからこの悲劇は今までの我々の革命運動の小ブル性をえぐり出し、その終焉を意味している。にも拘らずそれは（上野兄も言うように）小ブルの憤激をもって強烈にヌタ俵のく反動の嵐を告発している。そのように階級的位 置を見抜かないならば、まさしく《右も左も真暗闇》となり虚無と絶望の沼と森をさまよねばならなくなるだろう。

⑤革命兵士＝赤軍兵士の立場について （この項紙数がないので略。一言、上野兄の「革命家の条件」に賛成

する。

④革命の軍隊の建設について。「三種の軍隊」ということがよく言われる。上野兄も言っている。だが僕はこれら「三種の軍隊」についてよくわかっていなかったとか、個人的資質の問題に還元することは全く誤りだと思ふ。問題はより深いと思ふ。僕自身答えがある訳ではない。とにかく整理していつてみよう。(先きに政治・組織路線の問題が根源であると書いたが、ここでは核心的な組織路線上の理壁について簡単にだけ書いてみます)菩薩の総括から花園兄はドブレに依拠しつつ「ゲリラ、ゲリラ戦」を主張した。それはドブレのゲリラ＝生成しつつある党として、従来の政治指導部という党から脱皮し、党の位置の転換を促すものとして画期的なものであり、ボサツ型の前段階蜂起の非現実性に対するゲリラ戦の提起とあいまって非常に魅力的であり、蜂起主義という小ブル鎮念性の克服に有益なものであった。一方塩見議長は新たに現代帝国主義論構築の作業に着手しつつ、世界・日本革命戦争の対峙段階論から持久戦戦略をみらびき出し、花園兄やボサツの獄中同志たちの意見をまとめ、対峙的持久的ゲリラ戦戦略を提出しその核心を「軍の即の党・党の軍化」とした。それはドブレ主義の批判もふまえて語られていた。「ドブレによるカストロ主義の歪曲＝ドブレ主義は軍の中の党の意義を誤解し、党＝軍化し、軍の絶対化や無政府主義的傾向を許容し、農民や、都市プロレタリアートとの統一の問題を見落してい

る点にある。カストロは軍の中の党＝7.26グループを中核として新しい軍と結合し、軍を統合し農民対策、都市対策を卓越した天才的軍事指導とともに隙間なく展開していること」(序章No7塩見論文)こういう獄中の同志の意見に対して我々獄外の者は6月敗北以降党組織の組織的後退、綱領論争の拡散化、建軍方針の模索を続けるなか、70年秋前段階蜂起は自然産出し、機関紙「赤軍No6」が出された。それは主に階級情勢が対峙段階になったのだという経験的見地からの主張から、持久戦戦略と連続的・攻勢的蜂起という従来と全く同様の主張であったのだが、綱領論争の総括という形での社会主義運動論二重権力論と階級形成、党形成の一元論の極限化、CC＝軍団長会議の復活という組織の整備をもって路線転換とした。具体的には戦闘部隊と予備部隊とR・Fの蜂起宣伝隊という形であったが、〈戦闘・工作・兵站〉は結合しようという方針であった。機関紙「No7」はマリゲラを吸収した結果、基調としては持久的ゲリラ戦があった。「No7」は建軍に対し、真正面からとりくんだ意欲的なものである。それは毛沢東同志の井岡山における建軍とC・マリゲラのサンパウロ党支部から都市ゲリラへの再編を学び、「党が軍を創り、軍が党を創る」に象徴される路線を獲得しようとしていた。今ふりかえって非常に残念に思うことは、井岡山の建軍から「新兵に対してその小ブル性をいかに克服するのか？」を導いたのはよいが、同時に「新兵同様、古参兵、指導部のもつ小ブル性

官僚性を克服し、プロレタリア階級性、党性を発展させるにはどうするか」という問題を全面的にとり上げ深めるべきだったということだ。僕らの間にはそういう問題意識があったが、それを結局はあいまいにしたことが、大層な素晴らしい同志たちを死なせるというこんな悲劇を生んだのだと思うとくやしくてならない。そして12・18の闘いがあり、そのインパクトによる内部論争の反動として「特別号」が出され収束主義という収束主義へのきい戻り（政治過程論の復活）混乱を深めた。しかしそれらのなかから「戦うことによって建軍する」というゲリラ主義が敵との攻防（われわれはその頃極度においつめられていた）の実践感覚から成長し、それを媒介に一連のM作戦が展開された。確かにそれは「党の軍化・軍の党化」をもって前哨的ゲリラ戦を切り拓いたと評価できるし、建軍武闘を開始したといえる。だが「党の軍化」それ自身では閉鎖主義の追認でしかなかったのだ。党の軍化は「軍の党化」即ち、革命軍として戦闘だけでなく人民の組織者、宣伝隊というものに成長しないなら革命軍の化物になってしまう。「党と軍と人民」を結合する形態・方法は何か？「軍の党化」の一つの具体的形態として「三種の軍隊」がある。しかしそれは未だ技術的側面から主張されているにすぎない。また過渡期綱領、過渡的闘争がいられている。それらは三種の軍隊を媒介にする戦術・政策ではあるが、それだけではダイナミックな運動を打ち立てることはできない。また日本ではウルグァ

のトゥパマロスのような非公然組織一元化ではありえない。フランス「プロレタリア左派」の民兵作戦が運動構造として教訓を与えている。……

今の僕には結論はない。最後の最も大事なところにきてはしょってしまった。こんな簡単に書いて誤解をうけるかもしれない。何らかの形で体系的にまとめるつもりです。ここでは同志森を敬愛している一赤軍兵士の悲劇に対する基本的うけとめ方を知って参考にしてもらえればそれでよいと考えます。この悲劇に対して「反革命」とか「暴挙」とかののしることは簡単です。嘆くことは簡単です。しかしそれは革命兵士の任務ではありません。獄中にある僕は日々、敵と闘っている外の同志たちの苦難から離れており、いかに独房で気が狂いそうな思いをしても外の同志たちの苦難の比ではないと思います。しかし僕は人民の勝利を確信しています。この悲劇にハマル的に対応する人はけっして克服しえないがプロレタリア階級性に立脚する人は必ずと成長するのだと思います。救援組織の皆さん、困難ななか弁護士の皆さん同志たち、友人たち、がんばって下さい。

3月30日夜

◇ ◇ ◇ ◇
——補（「——若干の意見」についての修正）——

僕は当初、悲劇的な事態に対する精算主義と教条主義に（とりわけ精算主義）対してどうしても批判しておかねばならないと思って「——若干の意見」を書き、「悲劇の根源」に対する卑劣的な矮小な見解を批判しました。

その批判は原則的には正しいものですが、具体的には問題を曖昧にするような主張だったと思っています。それは主に「統一赤軍の合同」と「同志森ら指導部の問題」です。

①統一赤軍の合同について(統一戦線問題) この問題についての反省は直接には革命左派の川島豪氏らの3・31声明を読んで強烈に統一戦線のあり方の深刻さを感じとったからです。いずれにせよ日本社会主義革命戦争においての地下武装統一戦線の問題は戦略的問題としてとり扱わねばなりません。連合赤軍から統一赤軍(統一党)へ発展せんとしたとき悲劇がおきたということはいかに分析しようとも統一赤軍のあり方を分析せざるをえないのです。川島豪氏らの「政治路線をもって軍事(路線)を統帥しなかったがゆえの破産」という主張は正しいがその内容として「反米愛国でなかった」とすることや、あるいは堀見議長のように「反米愛国=左翼盲動主義」とし、それと乖離したところで規律問題を分析するというような「政治」でバツサリ切ることに僕は反対します。政治路線の相違する二つの武装Gtが合同したが故に破産したというのは正しいだろうと思っています。しかし僕は組織的側面から把えないと把え切れなと思っていますのです。革命武装勢力の統一戦線の勝利と敗北の歴史は数限りなくあります。悲劇としてはスペイン内乱時、フランコの進撃の最中、スターリニスト党に大量しゅく清、テロされたPOUM、中国北伐戦争途上27年の国民

党による共産党に対するクーデタ粛清、これらは敗北です。(しかしこれらは独自武装勢力同志の統一戦線ではなく、加入戦術だった)キューバではカストロたちが、都市部学生革命Gtや地方ボス的Gtとの統一戦線に苦戦していたと思う。アラゴルのC.マリゲーラはMR8(?)との戦闘上の共闘で何度も作戦を成功させている。朝鮮の金日成将軍は30年代半ば国内光復会のテコ入れと同時に中国東北部の「朝鮮革命軍」のタグループを合流させている。カストロにしても金日成将軍にしても合流したグループがなんらかの形で後に問題をおこしているのではないかと思う。しかし金日成将軍は殆んど要質の武装部隊と共闘する場合でも戦場と日常において最大の同志愛と保護をもって対処し団結をかちとっている(民族主義者、独立軍や反日救国隊らとの団結、33年9月の東寧県城進攻の勝利等)これは大いに学ぶべきことだ。僕たちは基本的に小ブル政変、Gtに対しては「連合もすれば闘争もある」方針を、革命戦争タグループに対しては「団結一批判一団結」の方針で統一戦線をくむべきだろう。しかしその具体的運用に関しては前者では「道理、節度、時機」を重んじておかねばならないし、革命戦争グループに対しても「合流」に関しては慎重であらねばならない。僕は「大量処刑」という悲劇の根源を一概に「合流」に帰することは賛成しない。しかし中途半端な新党組織であったが故に、その団結と規律性を保持するために最悪の手段=脱落者処刑となったというのは全く正しい見解

について論じようとする人々は党組織に対する一定の立場を前提にしてしか論じることができない。マルジョアジーは、革命党を破壊しようとする立場から反共キャンペーンを行っているのであって我々は革命党を建設しつつある立場からこれに対決している。

——マルジョアジーのキャンペーン——
マルジョアジーのキャンペーンは連合赤軍の銃撃戦が「革命戦争ではない」こと「政治闘争の本流をはずれている」ことを懸命に強調したがこのことはマルジョアジーが革命戦争の秘匿を死ぬほど恐れており、現在の階級情勢は革命戦争への労働者階級人民の決起に必ずつながらざるをえないことを階級的本能で察知し連合赤軍及び我々を政治勢力として認めざるをえなくなっていることを告白するものであった。商業新聞による銃撃戦についてのアンケートでは「感情的にわかる」という比率が11%にも上ったのである。(これは67年10、8羽田闘争のあとの比率と同じである。)

中略(日共や新左翼動搖分子への批判)
このことは日本革命戦争の未来は全く明るいことをも示しているのである。「冬の時代」などという言葉は急進民主主義者、革命戦争に対して動揺している者、合法主義者の言うことである。労働者階級人民の、マルジョアジーに対する怒りと憎しみはとどまるところを知らずに至るところで爆発している。この階級的憤激の波は必ず革命戦争の大波にまで高まってゆくであろう。我々共産共義者同盟(RG)は連合赤軍を越えて進む。

アンケート集計

現在、全世界の情勢は天下大動乱の様を示し、新左翼革命派を志す我々にとっても、認識が現状の変化に決定的にたちおくられていることを痛感します。そんな中で救援会が、革命の大方としての役割を十分に担うためには、状況の変化に対して正しく判断し、革命の方向を誤ることなく活動しなければなりません。人民救援会では、情勢把握の手段として、3月中旬から、アンケートという形での意識調査を行いました。対象は人救ニュース講読者300名と我々が接しているごく一部の人限定しましたので、社会的には非常に狭い範囲です。社会一般の傾向を我々独自で調査する力量もなく、意識の動向を調査すると同時に、個々人の経年・年齢などによる意識傾向の変化を知り、さらにどのような系統性と関連性があるか、という点に主眼をおきました。内容は、米中会談・連合赤軍という現代の象徴的な2つのでき事と日本のこれからに關してで、これらの事件に対するかかわり方で、ある程度、現象的に知ることができるとは思いますが、思ったためです。実際にはじめてみると、設問のしかたが悪いという批判をかなりうけました。たしかに思いつぎ的な面も多く、設問の際分析をする時の事を、あまり考へに入れずに作ってしまいました。我々のアンケートに対する態度の不テッテイさを深く反省しています。それに加えて、アンケートの意図の説明が不十分であり、ニュース講読者と人救との関係の希薄さも原因して、発送数の約1割33名という少ない回収率でした。したがって、社会的傾向の資料にはなりませんが、我々の身近な人々の意見という意味でならば、参考になる問題を含んでいると考えます。この数少ない中においてさえも、個々人の思考傾向は特徴的であり、付された意見も貴重で、今後の活動の上で、我々のなすべき事を提起してい

るようです。そういったことを確認した上でお読み下されば
皆様方の何らかの参考になることはできるだろうと思います。

◎ 解答者のうちわけ

総数は33名、うち30才以下(18才以上30才まで)27名、
40才以上60才までが6名でした。職業では、学生が11名・労働者が14名(ホワイトカラー 5名・ブルーカラー 9名)主婦4名、その他(ル・プロ・自由業など)4名。活動経験のある人は19名、ない人は10名、どちらともいえないが3名でした。

◎ 集計: 結果

アンケートは、複数解答制ですので、集計は人数ではなく
解答数でいたしました。()内は総数です。

A. 米中会談について

	30以下 (32)	40以上 (10)	合計 (42)
1. ニクソンはアジアの革命斗争を 押さえきれなくなっている。	16	2	18
2. テレビで中国のようすを知ること ができてよかった。	5	3	8
3. 米・ソの均衡を破るために行なっ た。	2	2	4
4. ベトナム人民への裏切りである。	4	3	7
5. わからない	5	0	5

B. 連合赤軍について

	(33)	(9)	(42)
1. 敵と銃で闘う思想は正しい。	12	2	14
2. 敵と銃で闘う思想は正しいが、 時期が早すぎた。	5	0	5
3. 弾圧をまねいただけで、日本では 銃をとることはできない。	5	2	7

	(33)	(9)	(42)
4. 浅間山荘まで気持はわかったが リンチは正しくない。	5	3	8
5. 東大斗争までは支持できたが、 最近のバクダンや連合赤軍などは 支持できなくなった。	2	2	4
6. わからない。	4	0	4
C. 日本のこれから	(27)	(6)	(33)
1. 軍国主義失して危険な侵略国になる	19	3	22
2. わからないがばくせんとした不安を 感じる。	6	3	9
3. 福祉国家になり平和が築く わからない	0	0	0
	2	0	2
	(27)	(6)	(33)
4. 社会党・共産党などが政権をとれば よい。	0	3	3
5. 革命をやすべきだ。	15	1	16
6. なんともいえない。	12	2	14

以上のような結果になりました。

上にあげた資料では、個々人の経歴との関連性、付されている様々な意見をお知らせすることはできませんが、未だ、わかりやすい集計方法を探っている段階ですので、今後、皆様のご批判をうけながら、人救としての集計報告をまとめ、発表していきたいと思っております。又、今回の調査をきっかけとして、より幅広く、より深く、問題を考え、現状を認証する作業を行なっていくつもりです。

尚、詳しい報告に関しては、次号の人救ニュースに掲載いたします。

定価 50 円

千代田区神田神保町1-27 松屋ビル内
(291)4450

人民救援会